

豊かな産業技術力を誇るシイロの町。

生命を育むだけの無機質な培養器に魅力的な姿が与えられ、人々に代わり電子エージェントが多くの仕事をこなすようになってからどれほどの年月が経ったかわからないが、この町は常に時代の最先端を行っていた。駅や銀行や病院に学校、レストランに百貨店といったものには当然電子エージェントが実装されている。バスやタクシーにいたっては、ほとんどが無人だった。

「行ってきます！」

ロルブレは、研究室にこもる父にそう言って、出かけようとしていた。

「友達の家に行くのか？今日は早く帰ってきなさい」

そう言う父に少年は「どうして？」と返した。今日は六十日周期で訪れる『例のある日』ではないはずだ。時季外れのはぐれシトメージもまれに見かけるようだが、そ

の目撃談は酔っ払いがUMAや宇宙人を見たと言っているくらい信憑性に欠けるものがある。

「最近この辺で物騒な事件があったらどう？」

——夜遊びをしていた不良が真つ二つに切断された遺体で見つかる、という事件である。別におもてが明るいからと言って安全とは限らないが、早く帰るに越したことはない。

「なんだ、ガラにもなく僕を心配してくれてるってわけ？」

ロルブレが意地悪そうに聞くと、父は答えた。

「別に今更お前のことなど何も心配していない」

——と。

ロルブレは、後にした自宅の玄関に苦笑いを投げてから歩き出した。

大通りを歩く。道路を挟む両側には、オフィス街らしく高い建物が軒を連ねていた。その間に、研究員が昼休憩に利用するであろう食堂や甘味処、雑貨屋などがある。

向かう先は町外れのひとときわ高く大きな塔だ。そこは病院で、地下では入院費を滞納する患者が働かされているが、用があるのはそこではない。

直通のエレベーターで屋上まで上がる。

そこは、草花が茂り、蓮池のある、見事な空中庭園だった。

明朝体で『外科』と書かれた腕章をする老人が、如雨露じょうろで草木に水をやっている。

「相変わらず暇そうですね、トーニン先生」

そう、声をかけて、ロルブレは一礼する。

トーニン先生と呼ばれたその老人は、永く生きた者の落ち着きをもった声で答える。

「オヌシのトモダチのおかげでこの町の医者は商売あがったりじゃよ、ホホ。だからこうして漢方薬を育てるか、教師の真似事でもせんとやっていけんわい」

——真似事などは謙遜しすぎですよ。

ロルブレはそう思った。

今や珍しくもないオンライン上の仮想学校で教鞭をとるトーニン先生。彼の生徒であるために、医者よりも教師としての印象の方が強かったのだ。

「早くトモダチに会いに行つてやったらどうじゃ。まさかこの年寄りの解剖学特別授業を聞きに来たわけではあるまい」

そう促され、ロルブレは一礼してからその場を去る。

忽然こっぜんとたたずむ鳥居の下をくぐり、細い道を歩いた先に、何ともメルヘンチックな

小さな家があった。

「おーいバケウサギ、邪魔するぞー」

そうやって扉を開けると、そこにはパステルカラーで彩られたユメかわいい空間が広がっていた。薄い色で統一されたベッドや家具の上には、リボンがあしらわれたぬいぐるみが数体肩を並べている。

部屋の中に突如青年の姿が現れる。兎の耳を思わせる帽子に白装束のその人は、ほかに光を放ち、透明度七〇％程度に透けていた。その姿はなんとも神々しく、幽かそけしい。電子エージェントの三次元イメージ映像である。

「やあ、待っていたよ、ロルブレ」

白装束青年はそう言って、にっこりと笑う。

彼の名前は〈驚代おどろしろミコト〉または〈白兎明はくとみょうじん神〉。後者はどちらかといえはあだ名であり、トーニン先生には〈サギシロくん〉と呼ばれている。ある技術者に病院運営のために開発された電子エージェント〈サギシロくん〉は、精神科の医者なれど、精神

の治療のほか目の治療も歯の治療も盲腸の手術も患者の耳かき・鼻毛処理と何でもこなすオールマイティスーパーマチイシヤなのである。——そして、ロールブレの数少ないトモダチでもあった……。

「今、お茶を淹れるから」

サギシロくんがそう言うのと、家具の上のぬいぐるみたちが自身のリボンを手のように使い、紅茶とケーキをテーブルの上に器用に並べていく。

電子エージェントの三次元イメージ映像はあくまでその場にいるかのような感覚を見ている人に覚えさせるものであり、触れることはできない。サギシロくんの本体は、病院内のどこかに存在するであろうコンピュータに納められたプログラムであり、彼が患者に物理的干渉を行う際は、病院内のいたる場所に張り巡らされた帯状のメカを用いる。それと同じく、ここ職員住居スペースでは、電子エージェントプログラムと連動した（ヘシキ）と呼ばれる小型のロボットを用いて、たまに来る客人をもて

なすのだ。

「今日は何して遊ぶ？」

サギシロくんに聞かれ、ロールブレはケーキのフォークをくわえながら思索する。彼と遊ぶ内容など限られている。病院内のすべての位置情報を網羅もうらしている彼とするか、くれんぼなどすぐに見つかってしまいうし、手札てふだが丸見えのババ抜きなど面白くない。

「じゃあ、レゲーでもしようか」

そう言いロールブレは、くわえたフォークを皿の上に置き、持ってきた端末をモニタから伸びるコードと繋つなぐ。サギシロくんがその様子をうかがいながら、ロールブレに聞く。

「どんなゲーム？」

「どんな、って言われても説明しにくいんだけど……主人公の失われた記憶を取り戻すRPGというか、失われた記憶の中で関わっていると思われる殺人事件を推理する

アドベンチャーというか……。なんでもこれが発売された当時は、プレイヤーの気を狂わせるってことで有名だったらしいよ」

説明をしている間に、準備は整った。サギシロくんが「そりゃあおつかないゲームだね」とつぶやく間に、ロルブレはモニタに電源を入れる。

「せっかく買ったのにエンディング見ないともつたいないし……」

ロルブレはしばし間を置いてから、

「でも、君ならこんな楽勝だよね」

そう言ってニヤツと笑った。現役精神科医が精神を病んだら医者の不養生だと言わんばかりの、挑戦的な笑みだった。

「よーし……!!」

サギシロくんは、受けて立つぞと言うように、シキにコントローラを握らせた。ロルブレは彼のイメージ映像の横で、再びケーキを頬張りながらモニタを覗き込む。

そして、一時間程度が経過した。

「さすがに君でも一時間じゃクリアできないか」

ロルブレは、ぬるくなった紅茶の残りを飲み干す。

「なんだかCPUがこんがらがってきたよ」

ジト目になってそう言うサギシロくんの顔は汗だらけだった。イメージ映像はコンピュータの状態と連動することがある。今頃、彼の本体が存在するコンピュータの冷却ファンは回りっぱなしに違いない。

「くっ……、ここでさじを投げたら……ッ、現代医学の敗北だ！」

そんな大げさな、と、ロルブレは笑ったが、サギシロくんはなおもモニタを睨み付ける。

「それじゃ、僕はもう帰るよ。紅茶とケーキごちそうさま。暗くなる前に帰って来て
つて親父に言われてんだ」

ロルブレがそう言うのと、サギシロくんは少し驚いたようだった。

「えっ、君のお父さんが？そんなことを言ったのかい？」

「うん」

「そっか、そっか。お父さん、君のこと心配しているんだね」

どことなく嬉しそうだった。ロルブレは苦笑して「どうだかねえ」と答えておいた。

サギシロくんがあまりに切望するので、例のゲームが入った端末は、彼に貸してお
くことにした。彼は、メルヘンな家の出入り口でロルブレを見送りつつ、きつと今夜
中にはクリアしてみせるから、また明日放課後来てほしいと言った。

「うん、楽しみにしてる。また明日ね」

そう言ってロルブレは手を振った。

サギシロくんは、遠く小さくなっていくロルブレの背中が見えなくなるまで手を振り続けた。

「帰ったか」

そう言って家の裏から出てきたのは、

「トーニン先生……」

で、あった。

「授業中、生徒の姿はディスプレイに表示されるのだが、こうして放課後の姿を観察してみるとまた違ったところが見える。うむ、ロルブレは今日も元気でよろしい」

ロルブレが歩いて行った方を優しく見つめながら、トーニン先生はつぶやいた。サギシロくんは、軽く安堵のため息をつき、トーニン先生と同じ方向を見つめながら言

った。

「本当、元気になってくれてよかった……」

ロルブレは大通りを歩いている。日が暮れるまでまだ余裕があるとはいえ、空は徐々に^{こがねいろ}黄金色に染まり始めていた。モタモタしていればすぐにこの^{こがね}黄金は^{あかね}茜へと色を変えらるだろう。

「ちよつと近道しようかなあ」

そう、おもむろにつぶやき、細い路地へと入る。

ところ変わってここは、建物と建物が密集する薄暗い裏路地。

誰かの靴音が建物の間に反響する。大通りのざわめきを遠くに感じるこの闇の中、ただ一人歩みを進めるその男は、黒い^{すそ}裾を揺らし、腰に^{たち}太刀を携えていた。無表情で

冷たく、魂を感じられない人形のようなその顔には、独特の紋様が描かれている。

男は突如、歩みを止めた。数人の不良が地べたに座り、話し込んでいてその場を動こうとしない。

「すみません、道を開けてくれませんか」

黒装束の男がそうお願いすると、不良たちは不機嫌そうに睨み付けた。

「俺たちが邪魔だつて言うのか？あアツ?!」

「どーなんだよ、オイ！」

などと言いながら、不良たちは男を囲む。

——仕方がない。

とでも言うように、男は太刀に手をかけた。

その時だった。

「こらー！何をしてるんだ！」

この場には不似合いな高い声が飛んでくる。一同が視線を向けた先に立っていたのは、地味な出で立ちの少年だった。——ロルブレである。

「ひとり対たくさんなんて卑怯ひきょうじゃないか！」

そう叫び、彼は不良たちに近づいて来る。それを確認するなり、黒装束男は抜きかけた太刀を静かに鞘におさめた。

しばらくしたのち、不良達の去ったあとに残されたのは、みすばらしく地べたに転がる少年の姿だった。

「いてて……、助けるつもりが逆に助けられちゃったよ。君、強いんだね」

ロルブレは体についた土を払い、そう言って申し訳なさそうに笑う。

「己の弱さも知らずして戦いを挑むなど、無謀にもほどがある」

男に冷たくそう言い放たれ、少し気に障ったロルブレは、ふいっとそっぽを向く。しかし、結局はこの黒装束が一人で不良達を追い払ったことに違いはない。

「僕が手を出すまでもなかったね！いい殴られ損だったよ!!」

不愉快な気持ちを抑え込もうと思いつつも、つい乱暴なトーンになってしまふ。いっせ、助けようなどと思うのではなかった。ロルブレはそう思った。

「いや、そんな事はない」

黒装束がそう言うので、ロルブレは半ば吐き捨てるように「どうして！」と聞いた。

「また死体を増やさずに済んだ」

その言葉を聞くなり、ロルブレの中の不愉快さは徐々に戦慄せんりつに変わった。例の、不良が真っ二つに切断された事件のことを思い出す。

「……まさかとは思うけど……、君が近頃この辺で不良達を手当たり次第に斬り殺しまくっている殺人犯だと言うんじゃないだろうね……」

半ば、否定されることを期待した質問であった。

「手当たり次第ではない。進路を邪魔立てする障害物を払いのけているだけだ」

悪びれる様子もなく、しれつと言つてのける黒装束に、ロールブレはますます怖れを成した。まるで、機械的にその作業を行っただけと言うようだった。人を殺して、何とも思わないものなのだろうか。本当に、そんな凶暴で凶悪な、気味の悪い人間が存在するものだろうか……。

「それを……手当たり次第と言わずしてなんだと言うんだ……」

せいぜいそう言つて睨んでやるのが精いっぱいいのロールブレを、黒装束は怒いかるわけでも啜わらうわけでもなく、ただ、魂の感じられない目で、じっと見つめ返していた。

「……っ」

いやに不安な気持ちを覚えてならない黒装束男の眼光から、ロルブレは己の目をそらさざるを得なかった。

近道をしたがゆえに、こんな場所で殺人犯と出くわしてしまった。いつまでもこんな奴と関わっていたら自分の身も危ない。奴が腰から吊るしたでっかい刃物類で自分も斬り殺されるかもしれない。そう、そのでっかい刀みたいな何かで……。

「なんだ？こいつに興味があるのか？」

黒装束がロルブレの視線を察し、腰の太刀に手を当てて言った。思わず凝視してしまっていた。興味が無いと言えば嘘になる。

「……そりゃあ、まあ、男の子ですから」

年頃の男子というものは、とかく刃物に強い興味を覚えるものだ。ロルブレとて例外ではない。あわよくばその大いなる力を手にしてみたいと思わなくもない。——まったく、恐ろしい殺人鬼を目の前にしてもなお、彼に対する恐怖よりも、彼の持つ武

器を手にしてみたいという願望の方が勝るのだから、この時ばかりは男の性さががうらめしい。

そんな年頃男子の気持ちを知ってか知らずか、黒装束は太刀を腰帯から外し、ロールの前に差し出した。

「や、そんな、武士の魂を、滅相めっそうもございません！」

不良であるからしておそらく攻撃的ではあっただろうが、武装した敵兵でもない一般人を無慈悲に惨殺した彼の太刀に武士道精神が宿るとも思えないが、きつと大切なものに違いない。

「いいよ、助けてもらったし」

遠慮するなど言わんばかりに、黒装束は半ば強引にロールブレの手の上に太刀を置く。

手渡された太刀は、ずっしりとかかなり重い。ロールブレが黒装束に視線を送ると、彼

は頷いた。

ゆつくりと、鞘を抜いてみる。

「わー……、……すごい……」

刃に、顔が映る。

小柄なロルブレには途中までしか鞘を抜くことができない。

ゴクリとつばを飲み込む。右から左、左から右と全体的に眺め、そしてまた、視線は刃に戻ってくる。

この煌めきを見つめていると、魂が吸い取られるような気持ちになり、ゾクゾクツとした感覚が肌の上を通り過ぎる。どこからともなく根拠の無い自信が湧いてくる。今ならどんな勝負事にも勝てそうな気にさえなってくる。

それにしても、よく手入れのなされた太刀だった。今まであまた数多の人々を斬り殺し、

多くの血を吸ってきたなどとは信じられないくらいに、錆も刃こぼれもない。機械で大量生産された金属製フィギュアなのではないかとさえ思えるくらいだった。その金属製フィギュアにたった今魂が宿り、今からお前が主だあまじと言われているような気持であった。

ロルブレは、ふうー……、と、少し長めのため息を付き、ゆっくり刃を鞘に収めた。さすがにちよろまかすわけにはいかない。とはいえ、この殺人犯に返してもいいものか……。

全く考えの読めないこの無表情に太刀を返した途端、バツサリとやられることがないとは決して言い切れないのだ。しかし、返してもらえらることを信じたうえで〈魂〉を手にとらせたのだから、それを裏切るわけにもいかず……。

そうこうしているうちに、その無表情がロルブレに近づいてきた。用が済んだのに

いつまでも太刀を返さずそれを抱えたまま難しい表情で何かブツブツつぶやくこの少年に不信感を抱いたのだろうか。

——まずい……。

たじろぐロルブレ。とつさに、逃げるという判断を下すよりも先に、黒装束は素早くロルブレの手から太刀を取り上げると、腰帯に吊るした。そして、

「肋骨にひびが入っている」

おもむろにそう言い、黒装束は背の低いロルブレの前でかがむ。不良達にフルボッコにされた全身はもちろん、動くたびに胸が痛むのは確かであり、それが逃げ出すタイミングを鈍らせたと言えなくもない。

「な……、なんで、君はそんなことがわかるのかなあ……」

うろたえるロルブレに、

「動きで分かる」

黒装束はそう答える。そして、ひびが入ったと思われるロルブレの肋骨の部分に、軽く手を添えた。

「お、おい……っ」

ロルブレは、先ほどとはまた違った意味でうろたえる。当然だが、肋骨は胸の個所にある。人に触らせるほど立派な胸板を持ち合わせていないロルブレにとって、そこはコンプレックスの象徴でしかない。ジト目で睨み付けても黒装束はお構いなしであった。

バチッ！と、電撃のようなものが全身に走る。直後、全身と胸の痛みがスーッと引いていく。「何をしたんだ？」とロルブレが黒装束に聞くと、

「私は体内で合成した毒物を肌の表面から出すことができる。このように……」

彼はそう言いながら人差し指の先からひとしずく落としてみせる。地面が煙を吹いた。ロルブレは思わず飛びのく。さらに、

「その要領で、神経毒を用いて君の神経を瞬間的に麻痺させ、痛覚を刺激せずに小型の修復マシンを肋骨に撃ち込ませてもらった。なお、修復マシンは使い捨てだ。役目を終えたら分解され、体外に排出されるので心配はいらない」

と、続けた。

ナノマシン技術ならロールブレもいくらか知っていた。技術力最先端のこの町で、近年ちよくちよく使われる技術だった。しかし、毒を体から出す毒虫のようなニンゲンなどは知らない。

そういえば、この黒装束男、顔に変わった隈取りくまどがあるのだが、それがまるで虫のように見える……。そう思うと、ロールブレは微かに悪寒を覚えた。

「あんた……一体何者？本当にニンゲンなのか……？」

恐る恐る聞くと、彼は答えた。

「私は忘却ぼうきやくの都から来たシトメージ。開発コードネームは（兆）キザシ。ある目的があつ

て旅をしている」

——そう、彼はニンゲンではなかった。

酔っ払いの絵空事えそらじしなどではなく、時季外れのはぐれシトメージは実在したのだ。となれば、今までの機械的な殺人も納得がいった。そう、これは殺人事件ではなく、事故と呼ぶべき事例だったのだ。転がってきた岩に潰されて死んでも、その岩を殺人犯とは呼ぶまい。

「君こそニンゲンなのか？」

突如黒装束改めキザシにそう聞かれ、ロルブレはドキツとする。軽く血の気が引いたといつてもいい。

「……当たり前だろっ！なんでそんなおかしな質問するんだ？」

内なる動揺を押し殺し、何でもないといたたふうに答えたつもりだった。しかし、

「呼吸、瞳孔の開き具合、脈の打ち方、その他もろもろ全てが、君の言葉は偽りだと示している」

「……っ！」

彼はさらに追い打ちをかける。

「ヒトや人類と呼ばれる生物は、現在オスしか存在しないはず。極まれに生まれて来る先祖返り（カイゼリン）を除いては。そして、カイゼリンにはメスしか存在しない。君は先ほど自分は男の子だから太刀に興味があると言ったな。だがそれは偽りだ。なぜ嘘をつく？」

ロルブレはちらりとキザシを見上げる。無表情で見下ろしてくる。彼は機械的に自分の中で生じた矛盾を処理したいだけで、嘘つきを責め立てる気はないのだろうか、この無機質な目つきはロルブレの中の後ろめたさと相まって、何とも恐ろしげだった。

ロルブレは観念した。半ば開き直り、言った。

「ああ、そうだよ！僕はニンゲンの男の子じゃない。カイゼリンの女の子だよ！」
やはりな、と、キザシはつぶやいた。

ロルブレはため息をつく。少し気分を落ち着かせる。

「どうして嘘をつくかって？これといって理由なんか考えたこともなかったよ。本当のことを言う必要がないと思っただけから言わなかっただけ。それに……」

一呼吸置き、続けた。

「多くのニンゲンはカイゼリンを良く思っていないようだし……」

キザシは黙って聞いてはいたが、あまり興味があるようには感じられなかった。もつとも、表情を全く変えないので、心中を察することはできないが。

そんな彼が口を開いた。

「身体のパーツを切り落とし、うまくヒトに擬態ぎたいしたつもりのようなだが……それも完

全ではないようだ。成長するにつれ、ごまかしきれなくなるぞ」

ロールブレにはキザシが何を言いたいのかが大体わかった。表社会には滅多に姿を現さないAI搭載生物培養器を、チャラそうな男が連れていたのをロールブレは何度か見たことがある。カイゼリンは大人になると、生物培養器のような——まるでだらしがなく膨れたふところ懐ぜいにくの贅肉せきずいと、脊髄せきずいが通っているのかまるで怪しい奇妙な形の腰回り——そんな姿になるのだとか。ニンゲンが好むよう都合よくデザインされた「彼女たち」ほど美しくはないだろうが……。

とにかく、余計なお世話だと思った。

「カイゼリンは珍しい生き物だから、大人になる前に町を出て、どこかで子孫を残せつてじーちゃんの遺言なんだよ」

とりあえず適当にそう答えておいた。実際、祖父は茶飲み話の中でそうロールブレに話したことがあるので、嘘は言っていない。

これ以上、そういったことには触れられたくないロルブレは、怪我を治してもらった礼を言い、その場を立ち去ろうとする。が――

「待つんだ。――ただでは帰さないぞ」

――腕をつかまれた。

ロルブレはそれを振りほどこうとするが、キザシの拘束は強力だった。痛みを感じるほど握力は込められてはいないものの、彼のてのひらはうまい具合にロルブレの細腕にフィットして離れなかった。

「なっ……放せっ！一体どうするっていうんだ！」

この言葉を質問と理解した彼はこう言った。

「助けてくれた礼がしたい。その計画に私を使うといい」

「どういう事？」

ロルブレは首をかしげる。助けてくれた礼とは、不良から助けた……いや、不良の

死体を増やさずに済んだ札ということだろうが……計画とはこの町を出るといふことか。道をふさぐ人を見れば斬り殺すような殺人兵器が、新たな土地へ引越すための住居物件の手配や、近所さんに引越しそばを持ってあいさつ回りをしてくれるとでもいうのか。

「私はキカイだが生物的な機能も有している。事に申し分ないと思うが？」

「……ッ！」

キザシの言葉の意味を理解したロルブレは、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「な、なんてこと言うんだ、君はっ！」

バラが咲き乱れ、花びらが舞う、ピンク色のキラキラした空間の中で、キザシに肩を抱かれたロルブレは恥ずかしそうに「優しくしてください……」などとつぶやいている……。——そんな光景が、ロルブレの頭の中には広がっていた。

「私は一向に構わないが」

相変わらず全く表情を変えずに、現実世界のキザシが言い放った。

「ええい、この手を放せスケベ野郎！」

——そう、ロルブレが叫んだ直後であった。

「！」

何かに気がついたように、キザシは後を振り返った。もう一度ロルブレの方に向き直り、つかんでいた腕をぐいっと引き寄せる。

「うわっ？え、何？スケベ野郎って言ったの気に障った？」

「囲まれたな」

「え？」

あたりを見回す。人影が蠢くのが見えた。

「兄貴、あいつらです！」

そう叫んだのは、先ほど追い払った不良どもの一人だった。仲間を連れて戻ってきたらしい。

「お前ら、うちの舎弟どもを散々かわいがってくれたようだな。その礼はたっぷりさせてもらうぜ」

兄貴と呼ばれた男がそう言うと、周りの男達がロールブレとキザシににじり寄ってくる。

キザシはしばし無言で不良のみなさんを見回していた。そしてぽつりと一言、「やっぱり殺しておくべきだったかなあ」

と、つぶやいた。もちろんロールブレに「お前、何言つて……」とつつこまれたことは言うまでもない。

「君まさかこいつら全員ぶった斬るつもりじゃないだろうね？」

「できればそうしたいところだが？」

「ばか！おつかねえ殺人兵器なんかがお友達なんてまっぴらごめんだぞ！」

「友達、か。なるほどな……フフ」

キザシはそう言って怪しく笑ってみせた。今まで無表情だったこのキカイが意味深に笑うものだから、ロールブレは妙な不気味さを感じていた。

「私の中に蓄積された古い情報によると、男女が恋仲になる際には友達から始めるといふ。それはすなわち、最終的に女子を懐妊かいにんさせるための全ての始まりというわけだ」

「えっ……ちよ、その話まだ続いていたの？」

「私にあきらめるといふコマンドは存在しない。必ずや君の子孫を増やすというその計画を遂行してみせよう」

そんな二人のやり取りを見ていた不良達が、「何ごちやごちや言ってんだてめえら！」と叫ぶのにそう時間はかからなかった。

「よくも俺たちを無視しやがって……！この状況わかってんだろ？男同士で恋バナに花を咲かせるなぞ、キモワルい野郎共だ！」

もちろん、ニンゲンの女子が存在しないこの世界において、必然的に恋愛は生物培養器相手か男同士の二択となるわけであるが。

「男同士ではないぞ。シトメージとカイゼリンだ！」

キザシが叫んだ。ロルブレが、あんた何言ってくれちゃってんの！という顔になったことは言うまでもない。

「カイゼリンだと？お前がか?!」

「いや、私がシトメージで、カイゼリンはこっちだ」

さらに指をさしてご丁寧に紹介する。

「なんで言っちゃうんだよ！」

ロルブレは、自分の頭より上の無表情を見上げて叫ぶ。その無表情から反ってきた

言葉は

「言うなどは言われていない」

だった。

「この大馬鹿野郎！」

もうこいつぶん殴ってやりたい——。ロルブレはそう思うのだった。

カイゼリンの名を聞いた不良達の目は殺意が宿っていた。「汚らわしい……」とか、「殺せ……」といった、穏やかでない声も聞こえてくる。

「このようなところで恩人を殺されては礼もできないな。仕方がない」

そう言うや否や、キザシはロルブレをヒョイツと持ち上げ、ものすごい脚力で地を蹴り、飛び上がり、建物の屋根に着地する。そのまま脱兎のごとく屋根から屋根に飛び移り、殺気立った不良達があつという間もなく消えていった。

「カイゼリンが出たぞー!!」

そう、誰かが叫んだのは、二人の姿が完全に見えなくなった後だった。

——その夜——。

トーニン先生が蓮池周りの散歩をしていると、茂みの向こうからチカチカと光が揺れるのが見えた。

鳥居をくぐり、小さな家の戸を開ける。

暗闇の中、モニタが光を放ち、ぬいぐるみの影が壁で踊っていた。

「サギシロくん」

声をかけると同時に、ウサミミ青年の姿が現れた。暗闇の中で彼の姿はより鮮明に映し出される。

「あ、トーニン先生」

「怖いからそういうのやめてくれといつも言っておるじゃろう」

誰もいないところでわざわざ電子エージェントのイメージ映像を映し出す必要などないし、明かりもつける必要がない。なので、サギシロくんは苦笑いしながら「省エネです」と答えた。

トーニン先生はモニタに目をやる。チープなドット絵が蠢うごめいている。

「ロルブレから借りたゲームじゃな。これをあの子がやって来る明日の放課後までにクリアしようというわけか。お前さんも大変じゃの」

「問題ありませんよ。僕は同時に多数の処理をできることはトーニン先生もご存じのはずです。複数の患者さんを診る一方で地下工場の労働者さんの健康管理も行えます。きつと明日も忙しくなるでしょうけど、ゲームをするくらいなんてことありません」

——そういうことではないのだが……。

とは言わずに、代わりに、

「お前さんにとってあの子は今でもトモダチかね？」

と、訊いておいた。

「ロルブレは僕に靈魂ココロをくれた大切な人。それは今でも変わりませんよ。だからなおのこと、いつも元気でいてほしいんです。毎日ここに通ってくればバイタルも見ることができますし、例の精神疾患を抑える薬を入れたお茶とケーキも食べてもらえますから」

そう言つてサギシロくんはニッコリと笑つた。とてもうれしそうだった。

さらに彼は、夜明けを心底から待ちわびるようにつぶやいた。

「明日になればまた会える。楽しみだなあ……」

トーニン先生は、彼のその横顔を微笑ましい気持ちで見守つた。

—
夜は更ける。